



都市公園をはじめとする緑のオープンスペースは、都市環境の改善や防災性の向上等に寄与し、住民生活に潤いと安心をもたらしてくれる存在である。一方、公園の管理については、維持管理やサービス向上のための経費の増大など、さまざまな問題も生じている。

平成15年6月の「地方自治法」改正により、各自治体が所有する各種施設や都市公園に「指定管理者制度」が導入され、創意工夫に富んだ企画や効率的な運営により、利用者の多様なニーズに応え、質の高いサービスを提供している公園も多い。熊本市の水前寺江津湖公園も、そのトップランナーの一つである。

熊本県熊本市

宝の湖を守る

“森と水の都”の公園管理

宝の湖を守る

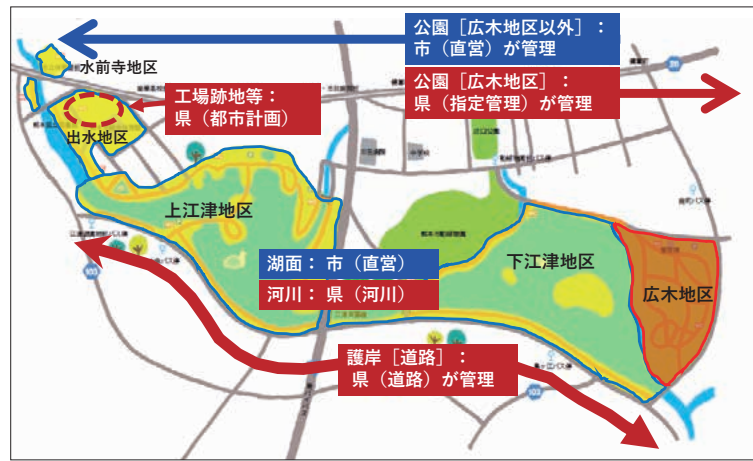
森と水の都の公園管理

●地域のオアシス・水前寺江津湖公園

熊本市の中心部から約5km南東に位置する江津湖。市街地にありながら、長さ2.5km、周囲6km、湖水面積は約50haの規模で、貴重な水生生物や野鳥を見ることもできる。また、1日約40万トンの湧水量を誇り、市の水道水の100%を天然地下水でまかなう「日本一の地下水都市・熊本」のシンボリック存在である。この湖を取り囲む形で「水前寺江津湖公園」がある。面積は約90ha、周囲には遊歩道やサイクリングロードが整備されているほか、芝生や広場も広がり、ピクニックなどを楽しむ親子連れなど、休日平日問わず訪れる人は多い。平成24年4月、熊本市が政令指定都市となったことを機に、江津湖全域の管理が熊本県から熊本市に移管され、(一社)熊本市造園建設業協会*が公園の管理を受託した。以来、5年に1度の更新を経て、現在に至っている。

* (一社)熊本市造園建設業協会は緑の空間の設計・施工・維持管理の専門分野の集団。昭和55年熊本市緑化推進協会として発足。昭和63年熊本市造園建設業協会、平成23年に一般社団法人となり、翌24年、水前寺江津湖公園の指定管理を受託、水前寺・出水・上江津・下江津・広木の各地区の緑化維持管理や、江津湖の湖面管理を行うほか、各種イベントも実施している。加盟会員63社。

「市での管理一元化が実現するまで、江津湖公園の管理はほんとうに複雑でしたよ」と、当時の状況を話してくれたのは、(株)シャインフィー



指定管理以前の公園の管理状況

ルド代表取締役本田啓修さん。熊本市職員として現場にいた。「公園は5地区に分かれているのですが、そのうちの1地区は県の指定管理者が担当し、それ以外の土地は市の直営、湖面は市、河川は県の河川課、護岸道路は県の道路課、公園内の工場跡地に建てられた施設は県の都市計画課と、県の窓口がいくつもありました」。管理担当が多くなればなるほど、誰が担当しているかわからない場所が出るし、それぞれが人員と経費をかけており、管理にどのくらいの経費がかかっているのかもわからないこともあったという。「県からしてみれば、湖や川に浮かぶごみは、そのうち流れていこうと考えるますが、公園担当の市からしてみれば、湖にごみがあれば汚いと思います。そこで、市長と県知事が話し合い、ポー

熊本市 人口730,899人、世帯数354,150戸(令和5年2月現在)
熊本県西北部に位置し、東部は阿蘇外輪火山群によってできた丘陵地帯、南部は白川の三角州で形成された低平野からなり、西部は有明海に面している。平成24年4月、全国で20番目、九州で3番目の政令指定都市となった。「平成28年熊本地震」(4月14・16日)からの迅速な復旧・復興に取り組んでいる。政令指定都市の中で唯一、「平成の名水百選」(環境省)に、「水前寺江津湖湧水群」と「金峰山湧水群」の2か所が選定されている。



1 水前寺地区 公園の玄関口。肥後細川藩ゆかりの庭園・水前寺成趣園につながるエリア。写真は明治初期に建てられた県内一古い洋館のジェーンズ邸。**2** 出水地区 体育館、図書館、芭蕉園など歴史文化の集積空間。**3** 上江津地区 湖の下から水がたくさん湧き、水遊びが楽しめる。**4** 下江津地区 遊歩道が整備され、湖の風景を楽しみながら散歩できる。**5** 広木地区 緑と水の美しい広場で、みなも祭りの会場にもなる広場空間。



トを1隻ずつ買って対応したこともありました」。公園の一元管理を検討する際、河川については県が担当してもよいのではという意見もあったが、湖と河川の線引きが難しく管理しにくいということで、市がまとめて管理することになったという。

●指定管理の強みを生かした業務

江津湖公園の管理運営拠点は、公園内にある水前寺江津湖公園サービスセンター。「センターには、私を含め5人の職員が在籍しており、交代で毎日、職員数名が常駐しています」と話すのは、サービスセンターの所長・今林則隆さん。「公園内の緑化維持管理（造園）や湖面管理などは協会内の8社が請け負い、トイレ清掃は外注し、その他施設はセンター職員を中心に管理しており、必要に応じ、修繕等は専門業者に発注しています」。運営事業に関しては、協会内の十数社が委員となっている指定管理者委員会が毎月1回開く会議で情報を共有し、具体的な検討・決定を行う。

湖面管理で多くの時間を割くのが、外来水草の駆除だと説明してくれたのは、副所長の尾崎友信さん。「昔はホテイアオイが多かったですが、ボタンウキクサ（ウォーターレタス）、ブラジルチドメグサなど、次々と強い水草が出現しますので、作業船（藻刈船）や人力で徹底的に駆除します」。作業日数は年間280日、回収量は1,500トンに及ぶ。たいへんな作業だが、頼もしい助っ人がいる。

年間延べ2,000人に及ぶ住民ボランティアだ。以前は受入体制が整わなかったため、ボランティアを断っていたが、指定管理後は積極的に受け入れている。

外来水草の駆除の一方で、自然環境の保全に精力的に取り組んでいる。県の絶滅危惧I類希少植物であるミズアオイなどの希少植物の保護・育成に力を入れるとともに、年間8回に及ぶ剪定や除草などでは、造園の専門的知識を駆使して自然に寄り添った管理を怠らない。

平成28年に起きた熊本地震では、発生後30分以内に会員たちが公園に駆けつけ、避難者への初期対応、園内規制や応急措置に奔走。絶え間ない余震の中で公園内の湧水の供給や、公園内で車中泊する住民たちへの対応にも当たった。

「花火大会の直前に台風が来て木が倒れてしまったときも100人以上の会員が緊急集合して復旧に取り組み、無事に花火大会を開催することができました。以前のように県や市がばらばらに管理してはとんでもできなかったことだと思います」と本田さんは振り返る。

コロナ禍でも、距離をとりながら過ごす住民たちの憩いの場となっている。指定管理者制度導入によって、造園の専門集団が常に江津湖を見守る体制ができあがった。



平成28年熊本地震ではライフラインが途絶したため、湧水を汲みこくる市民に活用された。



庭園ガイドウォークは歴史・文化資産を活用した取り組みのひとつ。



6 8



7



9



10



6 左から、本田啓修さん（株式会社シャインフィールド代表取締役）、今林則隆さん（水前寺江津湖公園サービスセンター所長）、尾崎友信さん（同副所長）。7 あっという間に繁茂する水草は公園の景観を損なうため駆除は欠かせない。8 ボランティアによる駆除作業では、個人はもちろんライオンズクラブなど団体が協力・支援するケースも多い。9 豪雨・台風の後では散乱するゴミや倒木を迅速に片付ける。10 コロナ禍にあっては駐車場の利用中止や施設の利用制限を行ったが、野外であることから、次第に人々が集まってきた、すぐに賑わいを取り戻した。



自然体験「わくわくえづっ子塾」

● サービス向上を目指して

公園の管理者に指定されてから10年が過ぎたが、その間、協会ではイベントの実施を積極的に取り入れている。地域と連携した賑わいづくりだ。コロナ禍で中止を余儀なくされた年もあるが、協会独自のイベントとして年1度の「みなも

祭り」、毎月恒例の自然学習イベント「わくわくえづっ子塾」などを開催している。また、加藤清正以来の長い歴史をもつ江津湖の歴史や文化を守るため、協会の会員たちが持ち前の技術を活かし、公園内の庭園の手入れやバショウなどの植物の管理を自主的に行っている。

熊本市との関係も良好だ。月1度の指定管理者運営委員会への参加や、公園でのボランティア業務への連携などで情報共有が図られ、市の担当が代わっても円滑な引き継ぎが行われ、持続可能な体制が維持されている。

イベントから発展し、市から飲食や物販施設の運営を望まれることもある。サービス向上の観点から対応したいのはやまやまだが、湿地帯という土地柄、恒常的な施設の建設は難しく、せいぜいイベント時の移動販売車のようなものを活用するのが限界だ。しかし、公園内でのレンタサイクルやバーベキュー利用など可能性のあるものには果敢にチャレンジしている。「レンタサイクルは園内が広過ぎるため、乗り捨てのシス

テムが必要であり、また、公園周辺には住宅も多いためにバーベキューには苦情が出て、継続ができませんでした」と本田さん。さまざまな条件の中で、市民にどんなサービスが提供できるのか、日常業務をこなしながら企画を考える日々だ。

かつて、サービスセンターには現業職員が8人配置されていた。そのため、人件費に事業主負担を加えると、年間、かなりの金額になっていたという。指定管理後の状況を考えれば、いかに指定管理導入が効果的であったかがわかる。

公園の指定管理に関心のある自治体も多い。しかし、行政、指定管理、実務を経験してきた本田さんは言う。「指定管理も利益が出なければ請け負えません。しかも、ある程度のスケールをもつ公園でなければ利益は出ないのです。請け負う方にも利益を出して従業員を養う責務がありますからね」。

緑地計画のパイオニアとして知られた北村徳太郎が、昭和5年に熊本を訪れた際、その素晴らしさに感動し、「市民永久の慰楽保存地」にすべしと、公園計画を打ち立てた江津湖。以来、行政によって、そして造園のプロ集団の手によって守られ、より磨きかけられ、熊本市民、そして未来の熊本市へと引き継がれる、まさに「宝の湖」となっている。

【取材・写真協力 水前寺江津湖公園サービスセンター・(一社)熊本市造園建設業協会】



「みなも祭り」でのマルシェ。「水面」を中心に「皆も」が楽しむとの意味で命名した「みなも祭り」は秋に2日間実施。造園の技術を活かしたプログラム、水を楽しむプログラム、周辺地域と連携したマルシェなどを展開する。